

「受け止める」姿勢で

村田町立村田第二中学校 三年

大内天寧
おおうちあまね

「これはダメでしょ！」

みんなでテレビを見ていた時、ある人が言いました。

「ぬいぐるみのお医者さん」という特集番組の中で、女性の方々に混じって、母親と一緒に来たという大人の男性が、大事そうにぬいぐるみを抱えている姿が映った時でした。

「いい年の男がぬいぐるみみて。しかも母親と一緒に・・・。」

とその人はあきれたように言いました。

私はそれを聞き、(大人の男の人がぬいぐるみを大切にしていけないのか。)と思いました。口には出しませんでした。

また、別の時にもこんなことがありました。

テレビ番組で、男性アイドルが町を歩いているところに出会ったボーイッシュな髪型の女の子が、そのアイドルのファンなのか、うれしさの余り泣いたり叫んだりしている様子を見た時です。

一緒に見ていた人が、こう言ったのです。

「ん？何だ？あ、よかった、女の子か。男の子が男の子を見てこのリアクションだとしたら、ちょっとね。」

私はこの言葉にも違和感がありました。またそのまま流してしまいました。やはり普通と違うと、こう言われるのはある程度仕方ないのかな、と思ったからです。でも同時に、『普通』って何？普通と違うとなぜいけないの？という疑問がわいてきました。

考えてみれば、日常にはこのようなことが本当に沢山あります。人はなぜ、自分や他の多くの人たちとは違う見た目や考え方の人に出会うと、変な目で見たり、疎外しようとしたり、時には攻撃したりするのでしょうか。

今年七月、この疑問についてみんなで考える機会がありました。それは、学校で行われた人権教室でのことです。『みんなが幸せに暮らすためには』というテーマで、町の人権擁護委員さんが中心となり、私たちのために考えてくださった特別な授業でした。

内容は、短いアニメを観て、そこから感じたことを中心に縦割り班で話し合い、みんなが幸せに暮らすためのキーワードを決めて、標語を作り発表しあうというものでした。

始めに観たアニメは、ある女の子の家族の話で、ケーキを焼くお父さん、ブログをやっているおじいちゃん、車椅子で旅行に行くおばあちゃんが、「ヘンだ」「変わっている」「わがままでは」などと言われることに疑問を抱くという内容でした。私を感じていた疑問と同じで、とても興味が湧きました。

これに対しての感想発表では、「その人の趣味や好きなことは自由で、誰にも否定することはできないと思う。」という考えを言った人がいて、私は何だか少し安心しました。

その後は小グループで「みんなが幸せに暮らすためのキーワード」を話し合いました。

私は班長で進行担当でしたが、まず多く出たのが「相手を理解してあげる」という意見で、その方向に進

むのかなと思っていました。

ところが、ある人が「理解してあげると言っている時点で差別していない？その人や考え方を特別視している気がする。」と言いました。「じゃ何もしていないってこと？」と別な人が言い、「そうじゃなく、自然に相手のことを受け入れるっていうか：」と話し合いが進み、模造紙は付せんでいっぱいになりました。

私も確かに、自分の考えが相手に「受け入れられた」と感じたとき、安心し、ちよつと幸せな気持ちになることがあります。では、みんなが幸せに暮らすために、どんな人のことも受け入れることはできるのでしょうか。

私はそれは無理だと思います。実際には、あまりに自分の考えと違いすぎて受け入れられないときもあると思うからです。多分そう思っている人は多いのではないのでしょうか。だから人は、自分と違う、普通と違う人を疎外しようとするのではないかと私は思います。それは無意識に自分を、自分の世界を守ろうとしているからではないのでしょうか。

そう考えていたときに、私の頭にふと浮かんできたのが『受け止める』という言葉です。

たとえ受け入れがたいことでも『受け止める』ことなら誰にでもできます。自分の考えと全く違っていても、肯定や賛成ができなくても、あまりにも個性的で共感できなくても、(なるほど、そういう考え方もある。そういう人もいる。)と受け止めるだけでいいのです。これで差別的な言動はかなり避けられると思います。「受け止め合う」ことが、みんなが幸せに暮らすことにつながるのではと思います、私は付せんに「受け止める」と書きました。

私は将来、人と接する仕事に就きたいと思っています。今回考えたことは、そんな私の将来に大きく影響すると思います。

私はこれからも『みんなと同じであることが普通ではなく、みんなが違うことこそが普通』という認識を持ち、相手のことを「受け止める」姿勢で人に接していきたいと思っています。

宮城県人権擁護委員連合会長賞

ありのままの自分

石巻市立河北中学校 三年

高橋 聖

「どうせ出来ないし」

僕のいつもの口癖でした。

僕は生まれつき左手がありません。かといって、日常生活でそのことに不満を抱くことはありません。でもたまに、できないことがあると左手のせいにするがありました。

初めは、幼稚園の年長のとき。鉄棒がとても苦手だった僕は、友達から馬鹿にされたくないという思いから、父に「練習を手伝って」とお願いしました。しかし、なかなか上手くいきません。ふてくされた僕は、「左手が無いからできないんだ」と虚勢を張りました。父は、そんな僕に、そつと寄り添い、庭に練習場所を作り、できるまで根気よく付き合ってくれました。

小学一年生の夏、僕は地域のソフトテニスクラブに入りました。中学校では運動部しかないこともあり、「他の人よりハンディがあるぶん、今のうちから少し頑張らないとね」と両親に勧められたのがきっかけです。最初の頃は、とにかくテニスをするのが楽しくて仕方ありませんでした。

しかし、次第に試合に負けたり、できないことがあったりすると、嫌になって投げ出すという、自分の弱さが目立つようになりました。今思うと、その一番の原因は、プライドが高く、左手が無いことを理由に甘えていたからだと思います。それほど上手では無いのに、自分を過信してしまう。そんな自分の弱さに気づいていても、その弱さと向き合わなかった、いや向き合おうとしなかったのです。

小学四年生になると、勝敗にこだわるようになり、練習もハードになっていきました。しかし、いくら練習をしても、成長が感じられませんでした。いわゆるスランプでした。

そのときです。普段あまり怒らない父に、初めて本気で叱られました。父だけではなく、テニスにあまり関心のない母にまで叱られました。でも今思えば、叱られるのも当然です。練習に付き合ってくれているのに、やる気が感じられない。できないことがあると、すぐに投げ出す。練習や試合の際に送迎してくれるのも、テニスに関わる様々な費用を出してくれているのも全て両親なのに。でもそのときの私は、自分のことでは、自分自身でいっばいっばいで両親の気持ちを考えることができませんでした。

父には「そんな奴の練習に付き合うメリットがない」、母には「精一杯頑張ってもらったお金を、そんなふうは無駄にしてほしくない」と言われました。胸を刺すような、きつい言葉。しかし、そこまで言われて、初めて、言葉の裏にある両親の思いに、僕はやっと気付くことができました。幼い日、鉄棒ができるまで根気よく付き合ってくれた父。手のことでハンディを感じてほしくないこと、テニスという強みを僕に与えてくれた母。父も母も、願いは一つ。それは、僕に、自信を持って生きてほしいということ。そんな二人の思いを裏切り、いつも出来ないことがあると努力もせずに言い訳を探していた自分。そんな自分の弱さから目をそらしていた自分。

誰かに指摘されたり、叱られたりすることには理由があります。以前のように、指摘されたことを受け入れられず、そのまま大人になっていたら、僕は、どうしようもない人間になっていたと思います。だから今は、とても両親に感謝しています。両親のおかげで僕は、夢を持つことができました。それは、テニスで全国大会に出場すること。

そこから僕の挑戦が始まりました。毎朝五時のランニング。毎日の素振り。お風呂上がりの毎日の柔軟ストレッチ、体幹トレーニング。サーブは片手な分、人よりも不利だったため、血豆ができるくらい練習しました。テニスが嫌になることや家族とぶつかることもたくさんありました。けれど、全国大会に出場したいという気持ちは少しも揺るぎませんでした。

小学六年生の春、僕はその夢を叶えることができました。結果は、思うように残せませんでした。全国大会に向けて毎日努力してきたことが自分の財産であり、自分自身の弱さと向き合えたからこそ気付いたことがたくさんあります。それは、いつも自分を支えてくれる人がいるからこそ、ありのままの自分でいられるということです。「どうせ出来ないし」そう嘆くのは簡単です。でも、それは自分の権利や可能性を自分自身で否定する言葉でもあります。僕は、もうその言葉を口にしません。それは、自分だけではなく、自分を信じてくれる人々を傷つける言葉でもあるからです。

ありのままの自分を認める権利。自分の可能性を信じる権利は誰にもあるのです。両親のお陰で、僕はテニスという自分に自信を持てるものに出会いました。これからも、夢を叶えるために挑戦し続けていきたいです。

僕は今の自分が大好きです。

優しさを優しさで繋げる

登米市立中田中学校 二年

原^{はら}谷^や小^こ夏^{なつ}

私はよく電車やバスを利用することがある。電車もバスも、どちらを利用するにあたってルールやマナーといったものがあるだろう。例えば、電車は降りる人が優先、優先席はお年寄りや妊婦さんのためになるべく空けておく、車内でけいたい電話での通話をひかえるといったことだ。

だが中にはやむを得ず、このルールやマナーが守れない人だっている。それはその人が悪いとかではなく、みんながみんな理解し合いフォローし合えばいい。誰もが心で思い簡単に口に発することだが、なかなか行動に移せないのが現実だ。

去年の出来事、私はいつものように電車に乗った。車内は静かでみんなスマホに夢中だった。だがそんな車内がほんの一瞬で一変したのだ。

それは赤ちゃんを連れた若いお母さんが乗ってからだ。最初は何事もなかったのだが次の瞬間、赤ちゃんが泣いたのだ。するとスマホに夢中だったみんなの視線がにらみつけるようにこつちを向いた。イヤホンをつける人背を向ける人、みんながみんなんだか冷たい対応をしていたのだ。その後そのお母さんと赤ちゃん

んはすぐに電車を降りた。その時みんなはなんだか肩の力をスツとぬき、ホツとしているように見えたのだ。その出来事を忘れることはなく、数ヶ月がたった時のことだ。私は高速バスに乗った。バスも電車と同様、車内はとても静かだった。

そしてあるバス停に止まると小さな子供連れの親子が乗ってきた。その子供は何かを楽しみにしているかのように、ワクワク、ニコニコしていた。だがまた同じようなことが起きた。冷たい目、冷たい行動。少し子供がさわいってしまったことで、大きな大人がそんなことをして良いのか。私は気持ちをモヤモヤさせていた時、若いお母さんが私の横を通りかかった。するとその子供にそつと話す。

「もう少しでお兄ちゃんになるの?」

「お兄ちゃんになるならもつとお利口さんにならなきゃ!!」

「できそう?」

と優しく語っていた。そう、どうやらお母さんのお腹の中には赤ちゃんがいたそうだ。それをすぐに察し、すつと行動に移せるお姉さんの姿がとてもカッコよく見えたのだ。

それから数十分後、私はバスを降り、その親子も同じバス停で降りたのだ。ニコニコしながら歩くその親子の姿はとても楽しく幸せで包まれているようだった。

その出来事から数日後、私はあるお年寄りが道路に物を落としてしまい、焦って必死に拾っているのを見た。その時頭にうかんだのはバスで会ったお姉さんだ。あの時、あのお姉さんみたいに優しさで人を笑顔にしたいと、私は思い足が動いた。

「手伝います。」

今までだったらきつと、言うことのできなかったこの一言。実際に言って、行動に移すと自分も、そして相手も笑顔になれる。そう実感したのだ。

そのまた数日後、私は駅に向かった。すると、前に高速バスで見かけたあの親子がいたのだ。その親子の様子を見ているとなんと小さな子供がお母さんの荷物を持っていたのだ。きつとあのお姉さんから教わったことをずっと覚えていたのであろう。

私もその男の子もお姉さんに大切なことを教わった。それは自分の勇気ある行動が誰かの助け、そしてなにより笑顔を守ることができるということ。一人が誰かに分け与えた優しさ、その優しさは次へ、次へと繋がれていくのだ。人は誰かに優しくされたら、次は自分、と誰かに優しくしたくなるのだ。

この出来事をきっかけに私は迷わず、すぐに行動に移せるようになった。あのお姉さんみたいに、誰かに頼られる、憧れられる存在でありたいと私は思う。

NHK仙台放送局賞

「適材適所」で生きる

塩竈市立第一中学校 一年

岩崎凌空

「身長百七十センチない男は人権ない」

今から約一年前、あるプロゲーマーの女性選手がこのような発言をしたことが物議を醸し、ニュースになった。当時小学五年生だった僕は、自分の身長の低さを気にしていたため、驚愕した。いくら色々な努力をして内面を磨いたとしても、身長が低いだけで中身を見てもらえずに、この先も辛い人生を送ることになるかと、自分の将来を悲観したのを覚えている。

僕は、生まれつき成長ホルモンの分泌が普通の人よりも少なく、三歳の頃に「成長ホルモン分泌不全性低身長症」と診断された。そのため身長が低く、いつも二学年下に見られている。低身長症の治療は長年しているが、まだまだ平均身長には追いつかない。そのため、小学生の頃は、下級生に「小ささ!」「俺より小さい!」「ほんとに六年なの?」などと言われ続けていた。その度にいちいち相手にはしていなかったが、正直悔しい思いをしてきた。

中学に入学した今も、僕の身長に対して露骨に言ってくる人はいないが、肌で感じることはやはり多い。

別の人と対等に話している人も、低身長である僕には、急に態度が大きくなる人がいる。だが、低身長だからという理由で、意図的に低身長の僕を攻撃してくる人は、実は少ない。そのような人たちは、低身長の人を自然と「弱者認定」して、心の中でどこか見下している。

実際に、中学に入学して二週間後に始まった部活動の体験入部の時に、突然、同じ一年生のある男子がこう言うてきた。

「あ、俺たぶん余裕で勝てるわ。」

そして彼はサッカーボールを蹴り始め、思いきり手を抜きながらミニゲームを始めた。身長が低い僕を見てそう思ったのだろう。僕はその彼の一言と態度で、この部に入りたいという気持ちが一気に失せた。

また、普段、同級生と会話をしていると、普通にふるまっているように見えても、言葉の端々に相手が僕を見下しているようなところが垣間見える。そして、僕がたまたま何かで目立ってしまうと「チビのくせに」と言う人が何人かいる。低身長以外の人が同じことをすると「すごいね」と言われるのに、低身長の人がすると「チビのくせに」と言われるのはなぜなのか。何をすることも「チビのくせに」と言われていくうちに、だんだんと僕の性格は卑屈になり、口数も減り、自然と一人で過ごす時間が多くなった。

僕はこの、低身長の人を「自然と」見下していることや、それが「当たり前」で、相手が傷ついているという認識がなく、「何も疑問に思わない」ことに違和感を抱いた。

そんなことでモヤモヤしていた時の夏休み、仙台の祖父の家に親戚が集まった。中学生になった僕を見て、祖父が「大きくなったね。凌空君は高校生になったら一気に身長が伸びるよ。楽しみだね。」と言ってくれた。そこから僕は祖父に低身長の悩みを打ち明けた。すると祖父はこんなことを言った。

「私がアメリカの大学に留学することになったときはね、日本でも低身長で散々ひどい目にあつたから、アメリカに行ったらさぞかし惨めな結果になると思っていったんだよ。ところがそれは全くの徒労だった。確か

にアメリカ人のほうが遥かに背が高いのは間違いない。けれど低身長であることで、からかわれたり、バカにされたことは一度もなかったよ。要は気の持ちようだね。外見ばかりにこだわっていると、それが態度や表情に表れて悪目立ちしてしまうんだよ。だから背が低かろうが、堂々としていればいいんだよ。」

僕は、はっとした。

僕は今まで、低身長であることに、とてつもない劣等感を抱いていた。だから僕は、心の痛みから自分を守るために、常に心の鎧を身にまとっていた。心の鎧を着せて、本心を見せずに、強く見せようとする事だけに躍起になっていた。ところが、たとえ心の鎧をまとうと、心の弱さは守れなかった。

ならば思い切って心の鎧を外してみよう。低身長だからと言って気負わず、ありのままの自分でいよう。生きるという事に素直になろう。この世に生きるすべての人は、生まれながらにして、かけがえのない価値を持っている。それが「人権」だ。生きているだけで必ず誰かの役には立っている。九十九パーセントの人にとって役立たずでも、一人の人にとって非常に救いになる人もいる。何か一つを敵にするような価値観は、生きることを辛く難しくするだけだ。

だから、無理に環境や周囲の人の考え方を変えようとせず、「低身長」も「胸を張って言える個性」として、堂々と生きていこう。他人の意見や世間の風潮に惑わされず、自分にとっての「適材適所」を見つけよう。

僕は「適材適所」で無理せず生きる。

僕はまだ、伸びしろしかないのだから。

いじめのない世の中になるために

南三陸町立志津川中学校 二年

高^{たか}橋^{はし}夢^{ゆめ}葉^は

みなさんは、「いじめ」について改めて考えたことはありますか。私は、お母さんに言われたことをきっかけに勇気を持てたのです。

朝、ニュースを見てみると「いじめ」という言葉がよく耳に入ります。最近のネットニュースでは、ある中学校の男子生徒がいじめられ不登校になってしまったというニュースや、部活動の先輩やクラスと同級生から悪口を言われたり仲間はずれにされたというニュースを見ました。また、中にはいじめられ誰にも相談できずに自殺をしてみましたというニュースもありました。

私も小学校の頃、仲の良い友達の悪口を陰で他の友達が言っているのを聞いたり、悪ふざけで友達に「死ね!」と言う言葉を投げかけている様子を見かけたことがありました。

でもその時は、見て見ぬふりをしたり、思っではないのに、

「確かに。」

と言ってしまったりしていました。もし、ここで私が何か言ったら、私まで悪口を言われるのが怖かったか

らです。また、「死ね!」といった言動を注意したところで本当にやめてくれるかも分からなかったからです。

ある日、私は二つ上のお姉ちゃんと家でけんかをしていました。本当に小さなことでけんかをしていたのですが、私は、思わず

「お姉ちゃんなんか死ねばいいのに。」

と言っしまいました。すると、近くで聞いていたお母さんが、

「死ねなんて言わないの。本当に死んでしまったらどうするの。本当に死んでしまったら、言ってしまった自分が後悔するよ!」

と言いました。私は、確かにそうだなと思いました。今まで何も考えずにお姉ちゃんに「死ね」などと怖い言葉を言っってしまったなど反省しました。

その時、私は、学校であったことを思い出しました。このまま、仲の良い友達が悪口をずつと言われ続けちゃっていいのだからかと思いました。そこで、今度、また悪口を言っている人がいたら注意をしようと考えました。

また、ある日学校で友達の悪口を言っているのを聞きました。そして、私は勇気を出して、

「何言ってるの!言わない方がいいよ。」

と言いました。何か私も言われるのではないかと心配だったけれど、勇気を出して言うことが出来て、何か心の底にあるモヤモヤがすっきりしました。教室で近くに座っていた男子がふざけて友達に「死ね」と言っていた時も、お母さんに言われたことを思い出して、

「本当に死んだらどうすんの。」

と言いました。勇気を出して言ったら、何も怖くなくなりました。

中学校に入ってからも、道徳でいじめの事や、命の大切さについて学びました。

私はその中で、いじめる側もいじめられる側も、決して、楽しい気持ちではないと考えました。相手の気持ちを考え、言つて良い事と悪い事、して良い事として悪い事をよく考えて行動しなければいけないことを学びました。また、いじめは、いじめている当人だけではなく、周りで一緒に笑っている人や、ただ見ている人も同じであることを改めて考えさせられました。

どんな人でも命を守る権利と命が守られる権利があります。私たちの命は、自分だけのものではありません。家族や身近な人達に大切に育ててもらった命でもあります。いじめにたえられなくなり、自殺をしてしまう人も多くいます。大切な命を失わないように、これからは、もしも、友達がいじめられていたら、見て見ぬふりをするのではなく、そういう友達こそ関わり合い、いじめている人に対しても、勇気を出して「何言ってるの？おかしいでしょ！」と声をかけるようにしたいと思います。

今、私は学級委員をしています。クラスをまとめる重要な役割として、悪口の聞こえない、いじめのないクラスをつくれるように頑張りたいと思います。そして、クラスの一人一人が楽しいと思える、毎日行きたいと思える学級をつくっていきたいです。

最後に、一人でも多くの人が、勇気を出して人の間違いに目をそむけず、注意できる人が増えたら、世の中から「いじめ」問題が減っていくのではないのでしょうか？そんないじめのない世の中になれば、私は、嬉しいです。

楽天イーグルス賞

人権について

南三陸町立志津川中学校 一年

佐藤穂花

私の曾祖父は、三年前の三月に九十二歳で天国に旅立ちました。天国に旅立つ半年ほど前に、趣味である庭の手入れ中に足をすべらせ転落し、意識を失い、頭にケガを負って救急車で運ばれました。幸い、ケガのみで手術の必要がなく一週間ほどで退院する事ができました。しかし、入院中に行つた検査で「胃癌の末期」であることがわかりました。お医者さんから病気の説明を受けた家族は、曾祖父のことを想い、胃がんであることは、今は本人には伝えないと話し合いました。

入院前の曾祖父は、とても元気で健康な人でした。九十歳を過ぎた後も、変わらず、ご飯をたくさん食べて、朝から夕方まで大好きな農作業や庭の手入れをしていました。私の曾祖父は礼儀や言葉づかいにきびしく、なんでも研究して自分でやれる事はやるという少し頑固な人でした。その反面、人に優しく、手作りの野菜を近所の人におすそ分けして、その喜ぶ顔を見て嬉しそうにする姿もありました。私が、作文や書道で賞をとった時も、とても誇らしいとほめてくれました。曾祖父はよく私に

「いつまでも好きな事をして、美味しいものを食べて元気で過ごしたいなあ。人の手を借りなくても大丈夫、

心配するな。みんなに迷惑かけないから。」と話していました。そんな曾祖父が頼もしく自慢でした。

退院してから、曾祖父の表情が固くなり笑顔が減りました。入院中、高齢ということもあり、一時的に認知症に似た症状が出現し、点滴の針を自分で抜いてしまったり、早く家に帰りたいと眠れない日もあったそうです。治療のための入院であり、点滴の針を抜いたり、転ばないように、手足を縛って管理していたとお医者さんや看護師さんに聞きました。退院する時、曾祖父はこんな思いするならもう病院なんて行きたくないと話していました。もとの元気な曾祖父に戻ってもらいたいと思い、家に戻った後は一緒に畑に行ったり、相撲を見たりとたくさん曾祖父に声をかけました。日に日に元気を取り戻し、ケガをした時の事も笑って話せるようになりました。その矢先、

「なんだか胃が痛いな。ご飯はいらない。胃の調子が悪いんだ。」

と話すようになりました。お医者さんからは、もう長くは生きれない、数ヶ月の可能性もあると聞いていました。食事も十分にとることもできず、体重も減りベッドで横になる時間が長くなり、家族で話し合い、胃がんのことを曾祖父に伝えて病院に入院して治療をすすめることにしました。しかし、曾祖父は、「病気は仕方ない。でも、病院にはもう行きたくない。縛られたりするのはいもうごめんだ。おれはこの家で最期を迎えたい。」と言いました。もう一度、家族会議をして、曾祖父の想いを尊重して自宅で過ごせるよう調整を進めていきました。訪問診療や訪問看護をお願いし、家族も交代しながら身の回りの世話をしました。トイレは自分の足で行くと言いつ天国に旅立つ前日まで力を振り絞って歩いていました。曾祖父らしさを見せてくれました。最期の日まで自宅で過ごす事ができ、曾祖父も安心した表情を浮かべ家族に囲まれて眠るように息をひきとりました。頑固だった曾祖父が

「すまないな、わるいな、どうもな。」

と言ったことは忘れません。

この大切な思い出からたくさん事を学びました。人権とは、人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持つ権利であり、私は人権とは、「その人らしさ」だと考えました。今回の経験の中で、少しでも長生きしてほしいという家族の思いの押し付けがあったと思います。入院中に体験したこわい思いがあつて、病院では自分らしく過ごせないという思いがあつたのだと思います。私たちは曾祖父を理解しているようで、出来ていなかったと思います。曾祖父の性格や人生において大切にしている事、好きな場所や最期の過ごし方をしっかり聞いて理解できればもっと残された時間を自分らしく過ごせていたのではないかと後悔しています。しかし、曾祖父ともう一度確認して家族みんなで理解できた後から、曾祖父の望む姿で最期を過ごせた二週間は、かけがえのない大切な思い出です。

人間ひとりひとり考えは違って、その人らしさも違います。そんな思いを理解できる力をつけていけたら、もっと人を大切にでき、優しく出来ると考えました。高齢者差別や女性差別、いじめやSNSでの誹謗中傷についてのニュースが絶えない時代です。偏見を持たずに、曾祖父のように、自分の意見をしっかり持ち、人の話をよく聞き、家族や友だちの良いところを見つけられる人間になりたいです。優しい言葉であふれる世界になることを願い、今回の経験で学んだ事を、今後に生かしていきたいです。

格差や差別のない世界へ

柴田町立船迫中学校 三年

石川 柚月

「男女格差日本125位。過去最低、先進国で最下位」という記事を読みました。調査対象の146カ国中125位という順番にとっても驚きました。男女の格差がそれほどあると、普段の生活ではあまり感じることはありませんでした。けれど、考えてみると女だから、男だから、日本人だから、中学生だからと、個人ではなく、大きな括りで考えられることが多いように感じます。

以前、校長先生が男女差別について授業をおこなってくれました。校長先生が女性の立場から、新聞記事やニュースをもとに作ってくださった資料には、次のようなことが書かれていました。

大相撲春巡業の時に土俵上で挨拶をしていた市長が急にあおむけに倒れたそうです。異変を察知した女性Aさんが、心臓マッサージを行いました。別の女性もAさんの救命措置を手伝いました。その中には看護師の資格をもった方もいたそうです。必死の救命措置の最中に耳を疑うアナウンスが流れました。「女性は土俵から降りてください」と。大相撲の行司が発したその言葉に批判が集まったそうです。「命を助けようとしているのに、女性だからといって土俵から降ろそうとするのは、差別ではないか」と。しかし、大相撲は

江戸時代からの250年も続く伝統としかたがあることも事実です。

この授業でクラスの間など意見交換をしました。「市長の命を助けたのに、「土俵を降りてください」は、ひどすぎる。」「緊急の時は、まずは命が優先されるべき。」「土俵の女人禁制は伝統で、それが当たり前の人間にとっては、差別だと認識はない。」など、様々な意見ができました。このような緊急時に何を優先するのが正しいのでしょうか。この授業で伝統を大切にしながら、男女差別もなくすることはとても難しい問題だと考えました。

最近、無意識の偏見というものが問題視されていることも、差別についてなのだとも知りました。無意識の偏見とは、「子育てをしているのは女性だ。」「パイロットを目指すのは男だ。」という、環境や教育や属性などから受ける自分自身が気づいていない、ものの見方や捉え方のゆがみ、偏りをいいます。血液型で相手の性格を想像することも無意識の偏見だそうです。

考えてみると、私たちが当たり前と思っている考えの中には、無意識の偏見がたくさんあります。私自身も、育児や家事は女性の役割と思っています。日本は、政治家の割合が今でも断然男性が多いし、長とつく職業は主に男性が担っています。長い歴史や伝統はすぐには変わらないから、その中で当たり前と思っていたことが、間違った考えだと気づくことが大切です。

今、各国が取り組んでいるSDGsの取り組みは、世界共通の目標として、とてもいいことです。他の国と日本を比較する勉強にもなりますが、日本はジェンダー平等の実現に対して多くの課題があると指摘されています。

私たちはこの問題を流行のように受け取めて、言葉のしっかりとした意味を知らずに、ジェンダー平等、男女平等と言っているのではないかと思えます。最近はずいぶんLGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの総称)の関心が深まっていますが、理解されているわけではありません。関心が

深まったとはいえ、いざLGBTの人を見たら、批判する人が世の中にはいると思います。批判までしなくても、なんとなく距離を置いてしまったり、色々な噂で騒がれたりするでしょう。

きっと、自分たちとは違う特徴をもっている人を批判する人はいなくなります。けれど、ほんの少し何かを変えることで救われる人がいるはずです。

一つ例を上げると、トランスジェンダーを日本語で表すと性同一性障がいという名前でした。ですが2019年、WHO（世界保健機関）の総会で二十九年ぶりに国際疾病分類を改訂しました。「性同一性障がい」が精神障がいの分類から除外され「性別違和」という名前に変更されたのです。私たちからしたら些細なことでも、当事者からしたらきっととても嬉しいことだと思います。自分の個性を「障がい」と分類されていた歴史が終わったのですから。

校長先生は言葉の中にも差別がある、例えば「父兄」という言葉は、社会や公の場に出るのは男だという昔の考え方の名残だ。と教えてくれました。

社会を急に変えることはできないけれど、これからは生きる私たちが、相手を尊重し、常に伝え方や言葉の選び方に敏感になり、差別と取られない発言や行動をしなくてはなりません。そのために、たくさんの人と話し、自分の世界を広げていきたいです。

審査員長賞

自分らしく生きる

気仙沼市立唐桑中学校 一年

千葉彩生

コンビニでお金を支払おうとしているおばあちゃんが、財布から現金を出すのに手間取っている。おばあちゃんの後ろに並んだサングラスの、一見強面の男性が靴をトントンさせ始める……。「さすがにイライラするよなあ。」私をはじめ誰もがやばい雰囲気を感じたであろうテレビコマースシャルの一場面。ここから、心が寛大な男性のラップが始まる。

「誰も怒ってなんかいない。あなたのペースでいいんだ」「何も気にすんな」「自分らしく堂々と生きるんだ」この男性の言葉に、コマースシャルが終わる頃には心が温かくなる。

八十歳になる私の母方の祖母は、白髪もなく腰も曲がっておらずとても若々しく見える。しかし、若い時に働いていた加工会社で、機械に手を挟まれ、指が思うように動かなくなってしまった。高齢による膝の痛みも出てき始め、歩く速度も遅くなってきている。そんな祖母と一緒に買い物へ行った時のことだ。祖母が商品の会計をする時、祖母が財布からお金を出そうとしていたが指を思うように動かさない祖母は、焦りからかなかなか小銭を出せなかった。すると店員さんは優しい笑顔と声で

「ゆっくりでいいですよ。」

と言ってくれた。その様子を見て私はうれしくなった。だが、そういうふうには優しく接客をしてくれる店員さんばかりではない。夕方などの混み合う時間帯に行くと、言葉には出さないが荒々しい態度になる店員さんもいるのだ。現代社会は特にデジタル化が進み、カードやスマホ一つで決済ができる。時代に追いついている人は、ピッピッとスマートな決済をするが、祖母のように現金で支払う人も少なくなる。スムーズな会計をすれば後ろに並んでいる人を待たせることもないし店員さんのイライラも軽減されるのかもしれない。しかし、祖母をはじめ他人に迷惑をかけていると思ってしまう人がいるのも現状である。

一人で車いすに乗っている人や、背の低いおばさんが買い物している姿もよく見かける。高い棚に置いてある商品が取れなかったり、商品が倒れ込んでいてあるのかも分からなかったりして困っているような場面に出くわすことがある。私が気付いた時にはすかさず、

「何か取りますか。」

と声を掛けて取ってあげることもある。「ありがとうね」と言われると気持ちがホッとする。「この人も、若い時にはいろいろな人を助けてあげただろうと思いつながら。」

日常生活の中で赤ちゃんが泣いている場に遭遇することも多い。そんな時、周りにいる人たちの冷たい視線を感じることもある。赤ちゃんを抱いたお母さんは何とか泣き声を静めようと、赤ちゃんを上下に揺らしたり赤ちゃんのおしりをトントンしたりする。それでも泣き声は大きくなるばかりで女性はそこから外れ、赤ちゃんが落ち着くのを待っていたりする。

赤ちゃんは泣くことでしか自分の気持ちを表現できない。そのことはどんな人でも分かっていることだと思ふ。だが人は「今」の自分のことだけを考え、イライラしたり大きなため息をついたりして怒りをあらわにする。「赤ちゃん」の姿は「来た道」、高齢者の姿は「行く道」。母が私にいつも言う言葉だ。人は誰でも自

分が一番尊いと感じている。だが人は決して一人では生きていけない。赤ちゃんは、大人に世話をしてもらわないと生きていけない。高齢者も誰かに助けてもらわないと生きていけないのである。自分の都合やその時の感情で他人をけなしたり邪魔者扱いしたりするのではなく、いつも温かい気持ちと穏やかな態度で接することができるかと思う。

「人権」とは「人が人として幸せに生きていくための権利」である。「擁護」とは「助け守ること」。人が幸せに生きていくために「助け合う、守り合う」気持ちが大切なのだ。

「支え合って生きていく」気持ちをお忘れなければどの人も幸せに生きることを守られるように思う。

人は思いがけない優しさに触れると心から「ありがとう」という気持ちになり、ずっと忘れることはない。自分がされて嬉しかったことを他の誰かにしてあげるだけで、それがそのまま連鎖し、優しさでいっぱいになるだろう。

「自分らしく堂々と生きるんだ」という言葉に励まされる「自分」の存在を否定せず、一人一人を尊重し、助け合い、認め合いながら、胸を張って生きていこう。

「救世主になれなくても」

大崎市立古川東中学校 二年

品しな川がわ詩うた葉は

十四歳の私は、おそらく同級生と比べて、大きな困り事、悩み事はなく、平和な毎日を送っている。そんな私の、数少ない悩み事の一つが「いじめ」だ。いじめはなくならない。道徳の授業でもいつも重要な問題として繰り返しクラスで話し合ってきた。全国どこの学校でもだ。しかし、どうしてなくならないのか。どうやったらなくすることができるのか。

小学二年生の時、いじめを受けた。仲間外れにされたり悪口を言われたりした。学校へ行くことが辛かった。先生方の指導でなくなったが、その後も、心に残るようなものが残り、どんどん奥手になっていった。私が元気に手を挙げたり目立ったりすることで、また何か言われるのではと不安で、自分の意見を言う事ができなかった。母によると、私は幼い頃から争いを避ける子で、友達に物や順を譲ることに抵抗がなかったらしい。子供同士のけんかが起こると、ずっとその場を離れることもあったそうだ。

そして、今、中学二年生。私の友達Aさんが、悪口を言われていた。クラス内だけでなく、二年生の多くの方がそういう雰囲気だった。暴力は辛いですが、悪口が与える心の傷は目には見えなくても計り知れない。

四月、同じクラスになり、Aさんと仲良くしていると、男子から「あいつとは関わらない方がいい。」とラインが届いた。いい噂がないAさんと一緒にいることで、私が巻き添えになると私を思ってたくれたのかもしれないが、私には、Aさんと関わらない方がいい理由が分からず違和感だけが残った。そのままいつも通り、Aさんと仲良くした。

ある日、Aさんが授業中に足をねん挫した時、「仮病だ。」という声が聞こえた。私はとても悲しかった。本当に痛がっているのに、心配するどころかけなしたことに、こんな嫌な雰囲気の中のクラスにいるのだと思ったからだ。私がAさんの状況だったら、とても苦しかったと思う。

悪口を言った人は、私と接する時は普通のクラスメイトだ。おもしろいことを言って笑わせたり、係の仕事で頼りになったりすることもある。そして、それは、特定の一人ではないのだ。それぞれ、一対一では良い人だ。しかし、Aさんに対しての態度はまるで違う。それが、怖い。

初めは一人が言い放った悪口が、大人数になってしまふのは、どういうことだろう。仲間にならないと、今度は自分が言われるかもしれないという不安からではないか。私は、人を悪く言うことで安心を感じたくない。しかし、悪口を言う人は、絶対にいじめる側が悪い、と分かっているのに、一人になることが不安で、間違いを正せず、強い方、多い方に流れていく。特に、人数が多い学校は加速度的に噂が広まり、大人数になつていくのではないか。確かに、自分の意見を貫き通すことは、すごく難しい。人前で主張をすることが苦手な私にはなおさらだ。けれど、私は絶対にいじめる側に加担したくない。この性格なので、Aさんがいじめられていることに、「だめだよ。」と注意することができない。では、辛い状況になる友達に対して、何ができるのかと。相談に乗る、一緒にいる、楽しいことを一緒に考える、先生に伝える、できることはたくさんある。少しでも、理解して、寄り添うことはできる。

いじめがゼロになることは、すごく難しいことだ。いじめは、加害者自身が変わらないと、なくならない。

「他の人と違う。」「ちょっとおかしい。」と指摘することから始まる。Aさんのことを考えてみると、自分の意見を、少し強く言いがちなところがある。それが彼女の特性だ。それがいじめていい理由にはならない。強い言い方が嫌なら、そのような特性を周りの人が理解して接し方を考え、尊重すればいいのではないかと思ふ。

「みんなが安心して楽しく生きることができる社会」を目指し、苦手なことや欠点も含めて、一人一人がお互いを認め合って、尊重できないだろうか。「いじめ」をなくすために、一人一人が考えることが大切だ。友達辛い時、私ができることは、話を聞く、味方になることだった。自己満足かもしれないが。悪口を言うクラスメイトに対して、「やめよう。」と大きな声で主張する救世主にはなれないが、私のように「いじめる側には加担したくない。」と思いを持って行動できる人が、一人でも増えれば、何かが変わるはずだ。大人数の学校だからこそ、加速度的に増えていき、きつと学校は変わるのではないか。そう信じて、これからも互いの違いを認め、尊重しあい、自分らしく歩んでいきたいと思ふ。

仙台市中学校長会賞

「補う」

仙台市立五橋中学校 三年

鈴^{すず} 田^た あかり

昨年の冬。私は新たな視点を得るきっかけとなる、ある経験をした。

下校中、私が歩く道の先に車いすの人がいるのが見えた。人通りが少なく、白線が引いてあるだけで歩道もない。多くの建物の裏口が面している道だ。最初私はその人のことを気にしていなかった。珍しいからと言って、じろじろ見たりするのは失礼だろうと思っただけだ。しかし暫くして、どうやら建物に入るための何かに時間がかかっているようだと思付いた。正直どんなことで困っているのかすら分からない。声をかけたところで大した手伝いはできないかもしれない。自分の行動が迷惑にならないかと迷ったが、それでも何か力になれることがあるかもしれないと、勇気を出して話しかけてみることにした。

その車いすのお兄さんは、リュックを床に置いて、黒のナップザックに手をかけているところだった。内心緊張しながら、段差の前にお兄さんに声をかける。

「何かお手伝いできることはありませんか。」お兄さんは少し迷ったあと、「おねがいます。」と言ってくれた。私がお手伝いしたのは、段差を乗り越えるための簡易的なスロープの設置だ。お兄さんが車いすに引っ掛

けていたナツプザックには、2枚の板が入っていた。その板を段差に立てかける。板をちょうど二つの車輪が乗れるような間隔に調整して、お兄さんにスロープを上がってもらい、板を回収して袋にしまって、リュックを渡す。

お兄さんがリュックを持って、挨拶をして別れた。その帰り道で私は色々と考えていることがあった。一つ目は、車いすで段差を上るのは難しいという、当たり前にも思えることだった。今の流れだけを見れば、簡単だと思う人もいるかもしれない。しかしお兄さんの場合は、あの工程を全て座った状態で、一人で行わなければならぬのだ。座った状態で板を設置するのはだいぶ大変な体勢になるし、いざ上り終わっても今度は後ろを向くために回転し、低い位置にある板を回収しなければならぬ。前かがみになる時に邪魔になるからと床においていたリュックの回収もある。それまで私はなんとなくのイメージで大変なのだろうと思っていた。しかし実際に目にして、手伝ってみて、改めて車いすの人たちの大変さとユニバーサルデザインの偉大さを知ることができたのだ。

二つ目は、自分自身の無力さだ。私は、声をかけた方がいいが何をすればいいか分からなかった。情けないながらも「どうお手伝いすればいいですか」と聞いて、お兄さんに教えてもらいながらお手伝いをした。正直、二枚の板を見たとき、何に使うのか想像できなかったし、「立てかけるのをお願いします。」と言われてようやくスロープに使うのだと理解できた。道徳の授業で似たような状況を扱う話があったが、細かい状況描写がない。「困っている人がいたらお手伝いをしましょう。」そのことを学んでも、実際にどう手伝えばいいのかを知らなかったのだ。

自分のした行動が悪かったとは思わない。しかし、もっと円滑に助けられたらよかったという後悔もある。もしかしたら上るためにかかった時間は大きく変わらなかったかもしれない。もし変わっていたとしても、一人で上る方があのお兄さんにとって気楽だったかもしれない。多様性を重視する社会、平等な社会だと

いっても、お互いのことを知らなければ手伝いや気遣いも難しいのだと痛感した。

誰もその道を歩かない時、今もあのお兄さんは一人でその段差を上っているのだと思う。その道は歩道がない裏路地だし、建物自体も昔からあるものだったので、段差があるのはしょうがないことだと思う。現実的に考えて、町にあるすべての建物の、すべての入り口にスロープを作るといのは難しいことだ。しかし、これから作られる建物には、どんどんスロープを設置してほしいと強く思った。手伝ってもらう事に対して、ストレスを覚える人もいるだろうと思うからだ。様々なユニバーサルデザインが沢山の人々を助けてくれると思う。

「人権」とは、人が人として自由に考え、行動し、幸福に暮らせる権利だ。全員が生まれた時から持っている。どんな小さな子供にも、大変な事情を抱えている人にも等しくある。誰もが幸福に暮らせる、誰一人とこぼさない社会を作っていくためにはまず、共に暮らす多種多様な人々の生活を知ることが重要なのだと私は気付いた。そして、今ある建物がスロープのついている建物に移り変わっていくまでは、助けられる私達がお手伝いをしようと思う。私が遠くの文字が見えない時友達に尋ねると同じ様に、気軽にお互いに苦手なことを補い合える社会を創り上げるのだ。